



# 「真明の踊り講」今ここに



大教会では三年千日と仕切って「お願いづとめ」を勤めている

# 真明

発行所  
天理教芦津大教会  
〒546-0003  
大阪市東住吉区  
今川8丁目6番32号  
電話 06 (6702) 1980  
FAX 06 (6700) 1854  
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp  
印刷所 天理時報社

どのよふなたすけするのみなつとめ  
月日ゆうよにたしかするなら 七号 83  
つとめさいちがはんよふになあたなら  
天のあたゑもちがう事なし 十号 34

初代・井筒梅治郎様をはじめ真明組の方々、近くに病人がいると聞くと、おつとめの人数を揃え、鳴物を持参して病人の家に駆け付けました。この頃は、まだおさづけを拝戴している者がおらず、おたすけと言えはお願いづとめしか手立てがありませんでした。

一同は、水をかぶって身を清め、病人の枕元で朝三座、昼三座、夜三座のお願いづとめを勤めました。中には「私の命を○年お供えします」と心を定めて願う者もあり、一身一家の都合を捨てた命がけのおつとめでした。そのため、平時においてふりの手一つ違ってもお願いづとめに連れて行かれず、おてふりが確かな者はたとえ子供でもお願いづとめに出ていました。自ずとおてふりの稽古は真剣そのもので、やがて「真明の踊り講」お手は真明組に聞け」と言われるようになりました。

大教会では1月25日より「お願いづとめ」を勤め、連日神殿は「真明の踊り講」と呼ばれた往時を思わせる、人をたすける心、勇んだみかぐらうたの歌声、お手を振る者の熱気に溢れています。このおつとめで、全国各地で皆様がかかっておられるおたすけを力強く後押ししています。

## 正面四方

年明け早々に部内教会2カ所で、それぞれの前会長、現会長が出直すという大きなふしをお見せいただいた。特に現会長の出直

しは突然のことで、私共の教会の元旦祭の所役も勤め、祭典後の直会では一緒の席で御神酒を酌み交わしたばかりだったので、驚愕の極みだった。年祭活動の始まりに、大きなお仕込みを頂いたが、時が経つにつれ、不思議なことが見えてきた。まず今回のふしにより、教会に繋がる者の心が揃ったこと。そして何より、それまで就職を望んでいた会長後継者が、道一条で通ることを決意した。

にち／＼にをやるのしやんとゆうものわ たすけるもよふばかりをもてる

十四号 35

悲しみ覚めやらぬ中だが、必ず成程という日をお見せいただけると思ひ、歩を進めようと思う今日である。(岩)

## 《本部巡教 講話》

## 年祭活動は実動実践の旬

## —— 目標を持って歩もう ——

本部員 深谷善太郎 先生

昨年10月26日、秋の大祭において真柱様から直接「論達第四号」のご發布を頂きました。その場に参集した者は一様に、真柱様の肉声が胸に迫り、「何としてもご期待にお応えしたい」と感じたに違いないと思います。

しかし、分かったつもりでも、思い込みや誤解があるかもしれません。今日は、教会長をはじめとする主立つ人々に、論達に込められた精神と年祭活動の意義をいち早く伝えて、ようばく、信者を牽引する存在になっていただきたいと思っています。

教祖は、旬刻限の到来とともに月日のやしろとお定まりくださり、世界一れつをたすけるために、陽気ぐらしへのたすけ一条の道をお創めくださいました。以来50年にわたり親神様の思召をお伝えくだ

され、つとめを教えられ、ひながたの道をお示しくございました。そして明治20年陰暦正月26日、

子供の成人を急き込まれ、定命を縮めて現身をお隠しになりました。突然の出来事に人々は悲嘆に暮れ、茫然自失となりましたが、子供可愛い故、25年先の命を縮めて、今からたすけするとおさしづによつて、人々は心を立て直したのです。

当時は、公認されていない教えを説くことは許されていませんでした。それどころか、無断で人が集まると取り締まりの対象となり、裁判なしで警察が罰則を与えることのできる法律が制定されていた。そのために、お屋敷に人が集まっておつとめをすると、教祖が拘留される。そうしたことが17、8度も繰り返される中、人々は教

祖の御身を案じるあまり、おつとめを実行できず、ひいてはお屋敷に足を向けることさえはばかれる事態に陥ったのです。

そうした中で教祖は現身をお隠しになり、官憲の手の届かない姿となつて、人々に教えの実行を促されました。

## 実行、実践して味わう

当時の人々はすぐに教祖存命の理を信じたのでしょうか。昔の人は教育レベルが低かったので、物事を信じやすかったのでしょうか。ノーベル賞を受賞したある物理学者が「モーツァルトとアインシュタインはどちらが天才か」と問われ、「モーツァルトだ。アインシュタインがいなくても、いずれ誰かが相対性理論を発見したに違いない。しかし、モーツァルトはかけがえない」と答えたといひます。科学知識や学問は蓄積していくのですが、個人の才能や知恵は、昔も今も変わらない。

要するに、現代は過去の恩恵に浴しています。現代人の方が昔の人より賢いというわけではありません。

せん。昔の人だから信じやすかったのではないのです。おたすけに真実を尽くして体感したからこそ、確信したのです。

おさづけの取り次ぎに現れた不思議珍しい御守護に、教祖のお働きを実感したのです。実行、実践なしに存命の理は味わえない。また、実行、実践の中に、必ず教祖はお働さくくださるのです。今も教祖は、お姿を拝することはできませんが、存命のまま私たちをお導きくださり、世界たすけの先頭に立つてお働さくくださっているのです。

## ひながたはたすけの理話

続いて明治22年11月7日のおさしづがありすが、もう少し引用しますと、

ひながたの道を通らねばひながた要らん。ひながたなおせばどうもなろうまい。(中略)五十年の間の道を、まあ五十年三十年も通れと言えはいこまい。二十年も十年も通れと言うのやない。まあ十年の中の三つや。三日の間の道を通ればよいのや。

僅か千日の道を通れと言うのや。千日の道が難しのや。ひながたの道より道が無いで。

と続きます。親神様は、私たちの道を歩む目標が教祖のひながたにあり、通る目安として三年千日という期間を示されています。これを通り切れば、ひながた五十年を通ったのと同様の理に受け取ってくださいとお約束くださっています。合わせて、細道を通るようにしっかりと心を引き締め、真実を寄せ合って、一手一つに歩んでもらいたい、と述べられています。

この道の先人先輩は、この思召に応じて、年祭のたびに教祖への



御恩報じの実行に励んでまいりました。その結果、道が進展する御守護を頂いてきたのです。「教祖年祭への三年千日は、ひながたを目標に教えを実践し、たすけ一条の歩みを活発に推し進めるときである。」と、年祭活動の歩み方についてお示しくださっています。

では、私たちが通るべきひながたの道とはどんな道で、どんな通り方をすれば良いのでしょうか。論達にキーワードが3つ出てまいりました。「水を飲めば水の味がある」「ふしから芽が出る」「人救けたら我が身救かる」です。

まず「水を飲めば水の味がする」。このお言葉は、貧の道中、明日炊く米もないいうときに、教祖が子供たちを励ましながら通られたひながたのエピソード中の一節です。どんな中でも心一つで喜べるというひながたであり、健康の有り難さを噛み締めることの大切さを教えられています。

私は以前、がんで食道を全摘出された60代の女性からおたすけを願われたことがあります。その方は食道を全摘出したため、物が

喉を通りにくく、苦しいのですが、それをなかなか家族が分かってくれないと、涙ながらに私に訴えられました。

このとき私は、先ほどのお言葉を引用し、「長い間、点滴だけで生活をされて、物が喉を通らないという生活をなさったそうですが、改めて物が喉を通ったときはどんな感じでしたか？」と尋ねると、その方の顔色が変わって、涙をポロポロとこぼされて「それは美味しかったよ」とおっしゃった。「ぜひ、その話をお子さんにお伝えになったらいいますよ。孫子の代までの宝になります」と話しました。「素晴らしい話を聞かせていただいた」と喜んで、おさづけを受けてニコニコとしてお帰りになりました。

この方の病状は、おそらく来た時も帰る時も変わっていないでしょう。では、なぜつらい涙を流しておられた方が、嬉し涙を流して帰られたのか。それは「心がたすかったから」です。教祖のひながたは、百数十年前の昔の人をたすけ、そして今の私たちをたすけ、

これから100年後の人たちをたすける、「たすけの理話」なのです。

不自由だから気が付く、喜べるようになる、ということもあるのです。どんな中でも心一つで喜べる。「水を飲めば水の味がする」。何ともありがたいひながたです。

### 親の期待に応えたい

続いて「ふしから芽が出る」ですが、人生は必ずしも平坦ではありません。私たちの成人を促されて、親神様はさまざまなふしをお見せくださいます。

私は15歳の時、初めて産みの親の出直しを知り、精神的にしばらく不安定な時期がありました。中学校を卒業して天理高校へ入っていた春休み、夜両親がおちばに帰った後、生まれてから1歳になるまでのアルバムを一人で見ていると、写真の母の顔が、今の母と違うことに気付いたのです。

いったい母はどうなったのか。おちばの豊田山でお墓を探し、私は墓石で母の名前を知りました。それから母親恋しさで、いろいろな人に聞いたり、自分で調べたり

しました。親に聞けば一番早いのですが、怖くて聞けない。それからしばらくは、親と目を合わすことができず、弟や妹とも壁ができて、大変孤独な感じがしました。

そんな中で、母のことを知るうちに、母が22歳で出直したことが、私が1歳と10日のときだったことが分かり、母の人生を考えたときに、「自分がいい加減な通り方をすると母の人生まで台無しにする。

22歳で私を残した母の人生を考えたら、私はしっかりお道を通らねば」と思いました。親の期待に応えたいと思ったのです。

もう一つは育ての母です。弟や妹と分け隔てなく育ててくれた母に、心配をかけたたくない。産みの親と育ての親の思いに応えたい、心配をかけたくない、という一心で、気が付けば、自分がたすかっていたのです。

それまで私は「信仰する」というような心がなかった。それは御守護を知らなかったからです。当たり前、普通だと思っていた。それが当たり前でないことに気付いたのです。親の恩を感じたことか

ら、信仰する心ができたのです。

それから、22歳が目標になりました。私の家は代々短命で、せっかく子供が授かっても親が出直すことを繰り返してきました。自分が22歳になったとき、何ともいえない気持ちがありました。こんな若さで母は出直したのかということと、自分もいつ出直してもおかしくないな、と思いました。

今では母の3倍以上長生きして、家内も元気においていただき、子供を2人授かって、それぞれが結婚して、孫も1人生まれました。ありがたいことだと喜んでおりますが、ふしがあつたればこそ喜びだ実感しております。

ふしは多くの場合、私たちにוותつてつらく苦しい出来事です。しかし、ふしに込められた親心に気付くとき、それは喜びの台にもなるのです。

### ふしにこもる親心

皆さんの中にも、大きなふしを見せられている方や家族もあることでしょう。今はすぐに答えは浮かばないかもしれませんが、親神

様はただ苦しめるためにふしを見せられることは決してありません。そこには親神様の深い思召と大きな親心がこもっているのです。大切なことは、心を倒さず、芽を出す努力をすることです。論達にも、「ぢばを慕い親神様の思召に添いきる中に、必ず成程という日をお見せ頂ける。」とお約束くださっています。

昨年の8月、私共の部内教会の次女が発熱をいたしました。PCR検査をしたところ陰性でしたが、病状が悪くなり、急きょ憩の家へ行くことになりました。調べてみれば、劇症溶連菌感染症で、憩の家では初めての症例でした。入院する時点で意識がもうろうとしておりましたが、4日後には意識をなくし、いつ出直してもおかしくない状態になりました。

所属教会も大教会も本部勤務の部署でもお願いづとめをしてくれました。結果、18日後に意識が戻りました。それからだんだん元気になり、11月に退院し、親と一緒に挨拶に来てくれました。

私は本人に会うなり、「これからあなたの人生はバラ色や。何があっても喜んで通れる。あのとき本当なら命がなかった、その中たすけていただいた。これからどんなことだって頑張れる、喜んで通れる素晴らしい宝を頂いた。あなたのこれからの人生を楽しみにしている」と話しました。実際、命にかかわる大ふしを見せられましたが、不思議な御守護を頂いたら、ゼロからではなくて、プラスからのスタートになります。

同じく最近、子供の大病をたすけてもらった若い夫婦もいました。「なぜこうなったのか」とばかり考えても答えがない。しかしあるとき、夫婦で先祖代々の道を辿ったら、我が子と同年の子供を亡くした親がいたことに気付いた。先祖は子供を亡くしたが、うちの子は生きていると思ったら喜べた。そういう気持ちになって毎日心定めをして通る中に、不思議な御守護を頂いて、今は元気に暮らしております。

世間の人にとっては、ただの不幸でしょう。しかし私たちは「ふ

しから芽が出る」という姿をお与えただけ。なんとありがたいことでしょうか。御守護を頂いていることがありがたい。さらに身上や事情といったふしを見せられることも、また喜びの台となっていくのです。

### 人をたすける宝

もう一つは「人救けたら我が身救かる」です。私共の教会は、もう 21 年前になりますが、月次祭のてをどりを勤めていた女性が意識を失って倒れました。そのことがきっかけで、おつとめが終わった後、おさづけの取り次ぎをさせていただくようになりました。

この間、心臓に穴が開いていた子供の穴が塞がった、余命 2 カ月と言われて両方から支えられて来た人が、命が無くなるはずの月には歩いてお礼の参拝に来てくれた。不思議な御守護をたくさん見せていただきました。そうした奇跡のような御守護以外にも、山のように御守護を頂いたおかげで続いたのです。

おさづけを取り次いで、手応え

がないということは絶対にありません。寿命、健康はお金では買えません。一番の宝を教祖はお渡しくださいているのです。それは人をたすける宝です。そしてまた、おたすけの喜びというものは何物にも変えがたい喜びで、自分がたすかった以上に嬉しいのです。

私たちが期待されているのはおたすけです。お道のたすけ合いは、「ギブ & テイク」ではありません。たすけ合うことの素晴らしさは世界中の人が知っていますが、そうした世の中にはならない。それは「たすけてほしい」という身びいきがあるからです。人をたすけるという人が集まるから、たすけ合いの社会が生まれるのです。

私たちは直接教祖を拝した先人たちと違い、意識の上で教祖が遠くなってきたことは否めません。だからこそ、私たちから教祖に近づく努力をすることが大切です。それにはまず、おさづけを取り次いで、教祖のお働きを体感することです。ご存命でお働きくださる教祖の姿は、おたすけの実行、実践の中に味わうことができるの

です。

### 心が変わらない限り

世界では、戦争や内戦、紛争が絶えません。身近なところで考えても、SNS を悪用した犯罪や攻撃、無責任な言動が世の中にあふれています。こうした世界を救う道はどこにあるのか。

一人ひとりの諍いも、国と国との戦争も、元は人間の心が生み出しているのです。世界中で起こる戦争や紛争は、私たちが心を入れ替えることなしに解決することはありません。世界の人々の心の入れ替えより他に、世界を救う道はないのです。

私たちが陽気ぐらしの生き方をする。それが人間の生き方である、ということを経界中の人々に知らせなければなりません。それは私たちしかできない御用です。

論達には、この句にようばくとしてどう歩むか、具体的な歩み方をお示しくださっています。私たちは、たすけの元であるちばに心を寄せ、足を運んで伏せ込むとともに、ようばく、信者の皆さんが

教会に足を運び、親神様、教祖にしつかりと繋がってもらえるよう繰り返し足を運び、心を繋ぎ、丹精につとめましょう。丹精の基本は、足を運び、心を繋ぐことにあります。繰り返し信者宅へ、身上・事情の方へ足を運び、おたすけをさせていただきましょう。

大きな行事を開催したり、大人数が集まって何かをやるということとは、コロナ禍にあつてなかなか難しい。しかし足を運ぶこととはできる。足を運び、心を繋ぐという丹精を、まず教会長はじめ主立つ者は心がけたい。

次いで自ら率先してにいがけ、おたすけの実行に励み、親神様の御守護、教祖の導きを頂戴できるように心を尽くしましょう。

### 動けば神が働く

あるとき、兵庫県の豊岡で、部内教会長が脳内出血で倒れまして、救急で運ばれました。翌朝一番におちばから豊岡まで、車で約 3 時間かけて行きました。大きな病院でエレベーターが並んでいるのですが、その一つの前に立つと、す

ぐに扉が開いて、中から別の布教所長の息子さんが出てきたのです。「昨晚父が脳内出血を起こしてここへ運ばれたんです」と聞きましたので、目的としていた病室に行き、続いてその病室へ行きました。脳が腫れ上がっていたので、頭を白い布で覆っており、意識がありません。そんなときに私が来まして、家族は大変喜んで、「たすか

ると思った」と言うのです。

考えてみれば、兵庫県豊岡で夜中に病院に運ばれて、連絡もしていないのに、翌朝会長がやって来るとは思いません。たまたまエレベーターの前で会いましたが、途中でどこかで休憩していたり、信号につかまっていたり、逆に早かったりしたら、エレベーターの前で会わなかった。

おたすけ人が動けば、必ず神様は後押ししてくださるのです。お陰でその方はたすけていただきました。お礼に来てくださったときに、「何も覚えてないけれども、会長さんが来て、おさづけを取り次いでくれたことだけははっきり覚えている。あれでたすけていただ

いた」と言うのです。神様が「おさづけでたすかった」ということを、その人の記憶に残してくださっている。ありがたいですね。

私たちにできることは動くことです。動いたら必ず神様が働いてくださる。なぜなら、病気を見せられるのは神様だからです。神様が見せて、「さあおいで」と言ってくださっているのですから、おたすけ人が飛んで行けば、神様は絶対に向いてくださいます。

### 蒔いた種はすべて受け取る

また、ある教会長が神名流しをしていると、男の人が近寄ってきて質問をしました。「天理教と政党との癒着はあるのか」「霊感商法をするのか」と今時らしい質問をした後、最後に、「天理教はごみ拾いをするのか」と聞きました。教会長が「割合する方です」と答えると、「ああ、あれは天理教やな」と言うのです。彼は毎朝マンションの窓から、歌を歌いながらごみ拾いをしている人たちを見ていたそうです。そして最後に「天理教さん頑張ってくれ。応援するよ」

と言ってくれました。

蒔いた種は絶対に受け取っていただける。自分の知らない所で天に通じているのです。

また、私が道友社におりましたとき、ある取材を受けてくださった方が、車で黒いハッピを着たおじいさんが毎日トイレ掃除をしていたのを、子供時代に見ていたそうです。それを見て「天理教ってすごいな、えらいな」と思っていました。それで、「もし天理教さんから取材があれば、必ず受けてください」と頼んでいたそうです。

これも、そのおじいさんは黙々とひのきしんをなさっていたと思いますが、それを見ていた人たちに「天理教はすごいな」という種を蒔いていたのです。

誰かにほめられたり、すぐに結果が出ないと、無駄働きをしたように思いがちですが、動いて無駄なことは一つもありません。蒔いた種は受け取っていただいて、必ず生えてくるのです。

### 知っているだけでは

さらに論議には、子供、孫に信

念を持って教えを伝えることを示されています。

自分の家の信仰の元一日を、今頂戴している御守護の数々を、しっかりと伝えることが大切です。私たちは「今が当たり前でない」ということを知らねばなりません。これがいんねんの自覚にもなれば、幸せを実感し、感謝、報恩の心を持つことにも繋がる大切な角目です。

しかし、いくら正しいことを言っても、聞いてもらえなければどうにもなりません。正しいことを言っても、「あの人言うのだから」と聞いてもらえる人もあれば、「あの人には言われたくない」と聞いてもらえない人もあります。だから、しっかりと徳積み、伏せ込み、理づくりに励むことが大事だと思います。そのことによって、相手に聞いてもらえるだけのものが身についていくのです。

世界は今、激動の時代にあり、価値観も大きく変化します。普通の時代ですと、子供は親の世代から技術やものの見方、考え方も学ぶのですが、激動の時代は子供の

ほうが先へ行くことがあります。そうすると、親の世代の考え方は古い、今は通用しないという考えを持つことも出てくる。

生活様式の変化や考え方、価値観の変化同様、信仰も古いものと思われがちです。伝える側も「こんなことを言う」と古いと言って笑われる」と思うと、言わねばならないことも躊躇<sup>ちゅうちよ</sup>してしまふ。それだけに、しっかりと信念を持つて伝える必要があるのです。激動期においても、実は人間の本质に変わりはありません。

私たちは、自分がいつ出直すか、大切な肉親がいつ出直すのかという、こんな基本的なことを誰も知りません。そして、このことは必ずやってくるのです。情報手段がいくら進歩しようと、人生を生きていく中で、つらい悲しい思いは必ずするのです。

それは信仰をしていても同じです。しかし、私たちは教祖によって、親神様の御存在と御守護、人間は陽気ぐらしをするために生まれてきたという真実を知り、親神様は子供である人間をただ苦し

せることは決してなさらない、全ては成人を促されるためのてびきだと知っているのです。

その上教祖は、御自ら<sup>おんみずか</sup>ひながたの道をお通りください、私たちに生きる手本をお示しくくださった。こんなにあるがたく、頼もしいことではないのです。

大切なことは、先人先輩方のように実践することです。知っているだけでは、世界も私たちの運命も変わらないのです。

### 私たちが動かなければ

これから始まる年祭活動は、まさに実践実践の句であり、種蒔きの句です。収穫のときではありません。種を蒔かねば始まりません。種を蒔き、修理丹精を施してこそ花が咲き、実が乗るのです。

親神様がお与えくださる成人の句には、まずはが非でも通り切ろうと歩む心が大切です。どうしても何でもと仕切って歩むことが大切です。

私は今、学校の理事長をしています。高校、大学にはスポーツ選手がたくさんいます。アスリー

トのメンタルトレーニングでも、「目標を持つこと」が欠かせません。ただ一生懸命やるだけでは、どんなに頑張っても8割ぐらいの力しか出ない。目標を持って初めて100パーセント、時には120パーセントの力が出るそうです。

そして「目的を持つこと」も大事で、「自分のために」では全力を尽くしても100の力が出ない。「恩師のために」「親のために」「周りの仲間のために」となって初めて大きな力が出るといえます。

これはメンタルトレーニングの話で信仰ではありませんが、私は信仰にも通じるような気がするのです。なぜならこれは、心の問題だからです。

私たちも「目標を持って歩む」ことが大事です。教会として、ようぼくとして、具体的な目標を持つて仕切って歩む中に、達成の喜びもお見せいただけるに違いありません。ぼーっと暮らしたり、不足の種を蒔いて3年過ぎすことだてであり得るのです。同じ3年通るのなら、喜びの種を蒔いて通らせていただくのではないですか。

そして教祖百四十年祭を迎えたとき、どんな花が咲き、実が乗るのかを楽しみに、3年間を仕切って、本気で実践して通り切りましょう。

ここにお集まりの方の後ろには、まだまだ大勢の方がおられると思います。ようぼく、信者の方々に自分の姿を映し、共に励んでいた、世界の人々の心の入れ替えを促し、陽気ぐらし世界実現に向けて、一歩も二歩も前進させてい

ただきましよう。

私たちの力は微力です。自分一人が動いても動かなくても、あまり世界には関係ないとお思いかもしれませんが、私たちが動かなければ、誰も動く者はいないのです。私たちが動けば、その心と実行を親神様は大きくお受け取りくださって、2倍も3倍もお働きくださり、陽気ぐらしの世界へと近づけることができるに違いありません。

芦津に繋がる皆さん方が、三年千日を一手一つに勇んでお通りたい。ただくことをお願いいたします。

## 《本部巡教 閉講挨拶》

## 心を揃えて

## 三年千日を勇んで勤めぬこう

大教会長 井筒梅夫

昨年の秋の大祭で、真柱様より「論達第四号」をご発布いただき、今日の本部巡教を受けて、いよいよ三年千日と仕切った年祭活動が始まります。1月4日の年頭挨拶の席上で真柱様は、「仕切って勤めるといことは、年祭という目的に向かって集中して勤めることであり、この期間は普段よりも力を入れて成人を進める旬である」とお示しく下さいました。

仕切るとは区切りをつけることです。始めがあつて目指すところがあります。この目指すところが教祖百四十年祭です。御存命でお働きくださる教祖に御安心いただき、お喜びいただけるように、論達に精神に則つて、教祖から教えていただいた御教えの実行実践に集中して取り組ませていただいで、

仕切つて心の成人の歩みを進めるのがこれからの三年千日です。

今日ここに集うお互いは、大教会の在籍者と教会長夫妻であります。つまり、芦津ようぼくの先達を以つて任じるお互いです。まずは、私たちが時旬の歩みを率先垂範して、一段と勇んで成人の道に勤め励ましていただくことを、ここに固く申し合わせて年祭活動に踏み出したいのです。

そこで、芦津に繋がる教会長、ようぼくが、心を揃えて三年千日の歩みを進めるべく、芦津としての年祭活動の方針を定め、合わせて年祭活動1年目の目標を掲げました。

## つとめとさづけ

方針の一つ目が、「おつとめの勤

修とおさづけの取り次ぎ」です。

教祖は世界一れつをたすけるために現身を隠してまで、よろづたすけの御守護をなしくださるおつとめの実行を急き込まれました。

これが教祖年祭の元一日です。そして、存命の理となられた教祖は、広くお渡しになられたおさづけの上に存命のお働きを現され、各地で不思議な御守護が次々と現れて、道は瞬く間に伸び広がっていったのです。この「つとめとさづけ」こそ、教祖がおつけくだされたたすけ一条の道の二つの芯です。

大教会では1月25日から教祖百四十年祭まで、三年千日と仕切つて毎日十二下りのてをどりを添えて、お願いづとめを勤めます。この目的は2つあります。

1つは、教会長やようぼくの皆様方が国々所々で取り次ぐおさづけの上に、不思議たすけの御守護と身上平癒を祈念し、また事情たすけの治まりを願つて勤めます。

もう1つは、事分けて願ひ出てこられた方々を、祭文に連日奏上して、その方々の速やかな御守護

を願つて勤めさせていただきます。

皆様方にも、それぞれの教会の日々のおつとめ、月次祭のおつとめで人様のたすかりを真剣に願ひ、おたすけにかかつておられる方々の御守護を真剣に願つて、勇んでおたすけに励んでいただきたいのです。そしておたすけにかかれば、大教会へ願ひ出ていただきたいのです。大教会のお願ひづとめを、教会長・ようぼくの皆さんのおたすけの勇みの種にしていきたいと思います。

そして、おさづけの取り次ぎです。教祖が現身を隠されて後、先人たちはおさづけの取り次ぎの中に教祖御存命の理を実感し、そして教祖にお導きいただいて数々の御守護を頂戴されて、今日の礎を築かれました。おさづけによつて現れる不思議は、御存命の教祖のお働き以外の何ものでもありません。病む人には機を逃さず積極的におさづけを取り次がせていただけるように、普段から心がけたいと思います。

この三年千日は、たすけ一条の

原点に立ち返るべく「おつとめの勤修とおさづけの取り次ぎ」を年祭活動の方針の一つといたしたいと思っています。

## 人をたすける心

2 つ目の方針は「人をたすけ、人を育てる(おたすけと丹精)」です。教祖がひながたの道中で苦心をされ、心を砕かれたのは、世界一れつをたすけることと、そのための人材を引き寄せて育てられたことです。つまり、おたすけと丹精です。

おたすけで肝心なことは、人をたすける心です。「救け心真の誠」

(明治 21 年 2 月 16 日) と教えられるように、人をたすける誠の心を尽くすことです。

これは、ある布教師の話です。

「がんが進行して、治る見込みがなく、家族も覚悟を決めていた方のおたすけにかかり、『必ずたすかります』と言って、毎日通った。

なんとかたすかっていたきたいと、連日十二下りのお願いづとめをし、身上平癒におちばまで歩いて足を運び、水垢離もし、断食もして、おたすけに通ったけれど、結局出直されてしまった。

そのとき、この布教師は、『私の真実が足りませんでした』と家族に泣いてお詫びをしたのです。家族の方々は、『私たちですら諦めていたのに、この人は毎日一生懸命お願いしてくれて、死んだら自分のせいだと泣いてお詫びまでしてくれる』と。この布教師の真実が家族の心をより動かして、信仰の道に入ってくれました」という話を、昨年聞かせてもらいました。

身上たすけにおいては、結果としては奇跡的な御守護は頂けませ

んでしたが、この布教師の尽くした真実を親神様がお受け取りくださって、ご家族が真にたすかる道へと導きいただけたのです。

不思議な御守護があるかないかということは、これは親神様の範疇です。親神様にお任せするより他ありません。

私たちにできることは、「この人になんとかたすかっていたきたい」と、ひたすら真剣に親神様に、御存命の教祖に縋り、お願いを申し上げて、人をたすける誠の心を尽くすことです。そして、「この人のために私は何ができるのか」と思案して、親神様にお働きたいだけだけの真実を尽くすことです。この誠真実を尽くして、この旬おたすけに一段と励ませていただきたいと思います。

そして、人を育てる丹精です。教会のお預け統合によって、教内の多くの教会におちばにお戻りいただきましたが、この原因の大きな一つが、丹精力の低下にあることとは否めません。私たちはお預かりしている教会を、教会らしい教

会に一歩ずつ近づけていく努力をしなければなりません。教祖年祭はその絶好の旬だと思うのです。

丹精の基本は足を運び、心を通

わせ、世話することです。ようばくにとつて教会から流される旬の声はたすけの綱であり、教会長の取り次ぐおさづけは命の綱ともいえます。真剣にしっかりと丹精をさせていたいただきたいと思ひます。

このたびの年祭活動の本教の動きとして本部巡教に続いて全教会を対象に各大教会が主体となつて、全教会一斉巡教が実施されます。

この全教会一斉巡教は、論達の精神の徹底に加えて、大教会の年祭活動の方針と目標を所属のようばく、信者の皆様にお伝えして、実動を促す巡教でもあります。年祭活動を勇んでスタートできるかどうかはこの巡教によることが大きいと思ひます。

この巡教を年祭活動の丹精のスタートであると捉えていただきたいのです。所属するすべてのようばく、信者に声をかけて、集まってもらえるように努力をしていた



だきたいと思います。

もし、コロナ禍の影響や、やむを得ない事情で足を運べない方がいたとしても、どうか決して放ってはおかずに、こちらから足を運ばせていただいて、また改めて参拝をしてもらって、共に年祭活動に足並みをそろえてもらえるように、丹精の手を差し伸べていただきたいのです。

お互いに、この三年千日を仕切って、教祖が御苦心くだされた人をたすけることと、人を育てること。おたすけと丹精に精いっぱい勤めたいと思います。

### 親のご用を担って

3つ目が「ひのきしんと伏せ込み」です。方針の細目には「おちばに心を繋いで真実を伏せ込み、教会に足を運んで親のご用を担おう」とあります。

ようばくが、まず理の勤めをする。伏せ込む場所は、それぞれが所属する皆様方の教会です。それと同様に、教会長や教会の者が勤め、伏せ込む場はおちばであり、

大教会や直属教会、上級教会です。

私は現在、本部においてご用を勤めておりますが、私にとっては親代々が勤めた姿勢が手本です。特に父、前会長が「おちばにしつかりと勤めておれば、大教会は自然に治まってくるんだ」との信念で本部に勤めていた姿を身近で見えてまいりました。私自身も、芦津の上に結構な理を見せていただきたいの思いで、お屋敷のご用に勤めております。

足元で行き詰まったら、心の向きをおちば、親に向けることです。親のご用を担って、真実心で伏せ込んで、理づくりにお励みを頂きたいのです。

今月から、大教会詰員の方の神殿奉仕当番を再開し、春頃からは月次祭の伝供も再開する予定です。これも「人数が足りないから勤める」足りるから、もうよい」といったものでは決してなく、あくまでも大教会での伏せ込みの場であって、各々の教会に結構な理をお見せいただくための、殊におたすけの上に御守護いただくための理

づくりの場です。

親に勤め伏せ込んだ種は、親神様がしかと受け取ってください、必ず必要なときに芽を出してくださいのです。先を楽しみに、大教会のご用も勇んでお勤めいただきたいと思います。

ようばくも、働く場所や機会があつてこそ成人ができますし、これが御守護を頂く種まきにもなり、徳積みにもなるわけですから、ようばく、信者の方々に、ご用の一つでも担ってもらえるよう、丹精をしていただきたいのです。ようばくが親のご用を担って、理の伏せ込みができるようになって、共に成人の道を歩んでくれるようになるのは教会長の丹精次第です。

どうか、共に心を尽くした丹精をお願いしたいと思います。  
「おつとめの勤修とおさづけの取り次ぎ」「おたすけと丹精」「ひのきしんと伏せ込み」を大教会としての年祭活動の方針としました。これを心において、共に所属するようばく、信者の先頭に立って、年祭活動に一手一つに勇ませていた

だきたいと思います。

### 勇んで動き働く年に

今年は年祭活動1年目です。この3年ほどは、コロナ禍の影響でお道の諸活動も制限せざるを得ない場面が多々ありました。そのために、自らの信仰生活でも、できることすら躊躇している状況があるのではないのでしょうか。

しかし、じつとじていては年祭活動は進んでいきません。まだ動かない人は動き始め、すでに動いていると自負する人は、さらに勇んだ動きを心がけたいものです。年祭活動の1年目は、信仰実践に勇んで動き働く1年にしたいと思っています。

その中でも特に推し進める信仰実践として、「日々の理の実践」「おちば帰りと教会参拝（日参）の励行」「お願いづとめを芯におたすけの実行」をあげました。

この道は御恩報じの道です。御恩報じは続けることに意味がある。これが日々の理です。

危ない事、微かな理で救かるは

日々の理という。

明治26年4月29日

とあるように、道のために何か一つでも、たとえ僅かなことであっても、日々の理を続けられ、危ないところを御守護くださると教えていただいているのです。このことは、

一人一つの心、日々の理を以て  
あたゑという。

明治25年9月5日

というお言葉をもって教えていただくところです。

年祭活動の始動にあたって心を



全員で心一つに誓いのおつとめ

定めて踏み出すことが、その人にとっての年祭活動になります。定めたことを百四十年祭までやり続けられ、これを日々の理として受け取ってください、教祖が間違いない道にお導きくださいます。

次に「おちば帰りと教会参拝(日参)の励行」を進めていきたいと思えます。この道の信仰はおちばに真実を尽くし、教会にしっかりと繋がる信仰です。まずは教会長がおちばに心を繋いで足を運び、真実を尽しておちばの理を戴く。

そしてたびたびとおちばへ帰れないようばく、信者は、おちばの理を戴くため、普段から教会へ足を運ぶよう、積極的に促していただきたいのです。殊に日参は日々の理の実践にもなりますから、ぜひ声をかけて勧めていただきたいと思えます。

このおちば帰りと教会参拝、日参の励行を1年目の大切な動きと捉え、推し進めていただきたいのです。

3つ目はお願いつとめを芯におたすけの実行であります。梅治郎

初代様をはじめ、眞明組の先人方は、誰一人おさづけの理を戴いていない時代に、おつとめをもっておたすけをされました。この真剣なおつとめによるおたすけによって、数々の不思議鮮やかな御守護を頂かれたのです。私たちの先人はこうした手本を残してください。

大教会では明日1月25日から、皆様方のおたすけの御守護を祈念し、お願いつとめを勤めさせていただきますので、これを励みにおたすけ活動に勇んで動いてくださることを改めてお願いいたします。この「日々の理の実践」おちば帰りと教会参拝(日参)の励行「お願いつとめを芯におたすけの実行」の3つを、この旬の大切な信仰実践と心得て、年祭活動の1年目を一手一つに心勇んで動き働かせていただきますよう。

### 親の心に一手一つに

私は25歳で教会長に就任して、今年で39年目になります。今の私の年齢を考えますと、現職の教会

長として年祭活動を勤めるのは、この百四十年祭を勤めるのが締めくくりになるだろうと思っております。ですから、この度の年祭活動は、私は芦津の誰よりも勇んで勤めようと考えています。

勇んで掛ければ神が勇む。神が勇めば何処までも世界勇ます。

明治40年5月30日

と教祖がお約束してくださっています。皆さんもそれぞれの教会の中で一番勇んでください。一番勇んだようばくとして、三年千日を励んでいただきたいのです。

論達の締めくくりに、「御存命でお働き下さる教祖に御安心いただき、お喜びいただきたい」と述べられていますが、ここに真柱様の思いが集約されているように私には思えてなりません。

芦津の者一同、この親の心に一手一つに心を結んで、これからの三年千日を勇みに勇んで勤めぬかせていただくではありませんか。どうか、皆様方の、弥や増しの心勇んだ時句の歩みをお願いいたします。

(要約)

## 本部巡教 教会長年頭会議を開催

教祖百四十年祭に向かう三年千日の年祭活動の幕開けを目前に控えた1月24日、本部員・深谷善太郎先生をお迎えして、本部巡教を開催した。

これは、「論達第四号」の精神と年祭活動の意義の徹底を図るもので、在籍者、教会長夫妻、後継者夫妻など、280名が参加した。

大教会長の開講挨拶の後、全員で論達を拝読し、続いて深谷先生より講話（2～7頁に要旨掲載）。



巡教のお話の前に「論達第四号」を拝読

論達の中の「水を飲めば水の味がある」「ふしから芽が出る」「人救けたら我が身救かる」の教祖のひながたについて、自らの経験を元に分かりやすくお話しください、最後に、「3年間を仕切って、本気で実践して通り切りましょう」と奮起を促された。

その後、大教会長より閉講挨拶（8～11頁に要旨掲載）。年祭活動の方針と一年目の目標を発表し「この度の年祭活動は、私は芦津の誰よりも勇んで勤めさせていただきたい」と年祭活動への思いを述べられた。

最後に深谷先生を芯に、大教会長が数取りを勤めて、参集した全員でおつとめを勤め、勇躍をお誓い申し上げ、終了した。

引き続き、教会長年頭会議を開催。はじめに、年祭活動中に行われる大教会でのお願いごとめと、日々の理についての説明があった。その後、各部・各会からの連絡があり、理解と協力を求めた。

最後に、大教会長から干支の湯飲みの贈呈があり、閉会した。

## 立教百八十六年 春季大祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には世界一いつをたすけ上げたいとの思召から、教祖をやしるに最後の御教えをお説き明かし下され、陽気ぐらしへとお導き下さいます御厚恩の程は、誠に有難く勿体無い極みでございます。私共は、御親の思いにお応えさせて頂きたいものと、心の成人に励み、御恩報じを日々思い念じてたすけ一条に勤めさせて頂いておりますが、その中でもこの月の二十六日は、教祖が子供の成人をお促し下さる深い親心から、定命を二十五年縮めて現身をお隠し遊ばされ、存命の理を以て世界ろくに踏み均しにお出まし下された忘れ得ぬ日でございますので、御本部春季大祭の尊き理を頂いて、只今から役目にあずかる者一同心を合わせて、座りごとめ、陽気てをどりを勇んで勤めて、大教会春の大祭を執り行わせて頂きます。御前には、折柄の寒空も厭わず参らせて頂きました芦津の道の子達が、教祖年祭の元一日に深く思いを致し、一層の成人をお誓いして、共につとめに勇む状を嬉しく御照覧下さいまして、親神様にもお勇み下さいますよう御願い申し上げます。

さて教祖百四十年祭に向かう年祭活動踏み出しの年を迎えて、明日に本部巡教を開催し、この月から五月にかけて全教会一斉巡教を実施し、二十五日より三年千日と仕切ってお願いごとめを執り行わせて頂きます。この年祭活動始動の旬に、私共をはじめ芦津に繋がる教会長、ようばく一同は、論達第四号にお示し下さる精神に則って、「おつとめの勤修とおさづけの取り次ぎ」「おたすけと丹精」「ひのきしんと伏せ込み」を年祭活動の方針とし、御存命でお働き下さる教祖にご安心頂き、お喜び頂くことを各々の心の指針に据えて、これからの三年千日を一手一つに心を揃え力を合わせて勤め抜かせて頂く決心でございます。そして、今年は、時旬に相応しい信仰実践に、勇んで動き働かせて頂く事を固く誓って、年祭活動第一年目を、力強く踏み出させて頂きたいと存じます。

何卒この心定めをおらかな御心にお受け取り下さいまして、親神様の大きな御守護を以て、教祖年祭の旬に相応しいたすけ一条の勤めを果たさせて頂き、教祖にお受け取り頂ける成人の歩みを一手一つに進ませて頂きますようお願いの程を、一同と共に慎んで御願い申し上げます。

《春季大祭 神殿講話》

## 諭達の精神を胸に

## 年祭活動一年目を積極的に動こう

役員 井筒文夫

### ひながたを通る

真柱様は「諭達第四号」に「仕切って成人の歩みを進めることが、教祖年祭を勤める意義である」「教祖年祭への三年千日は、ひながたを目標に教えを実践し、たすけ一条の歩みを活発に推し進めるときである」と明示され、ひながたの実践と、おたすけの活性化を強調くださっています。

ひながたの道を辿ることについて中山善衛・三代真柱様は、「教祖のひながたとは何であるか。それは教祖によりお示し下された手本であります。教祖が、私たちに教えて下された陽気ぐらしへの手本であります」と仰せられ、「陽気ぐらしへ向かい、お教え下されたこの道の教えに心を合わせていく、

教えを素直に実行することが、ひながたを辿ることにつながる」と仰せ下さいました。

日々の生活の中から、この道の教えを教え通りに実践して心を澄み切らせ、陽気ぐらしの喜びを味わおうと努力することが、ひながたを辿ることに通じるのです。

教祖はひながたの最初、貧に落ちきられる道を通られました、貧の道中、何をお残しになったのでしょうか。それは、「どんな環境でも、心一つで喜び勇んで暮らすことができる、陽気に暮らせる」というひながたです。

私たちには毎日、いろいろなことが起こってきます。その与わってくる姿の中から、「ありがたいな、嬉しいな、結構だな」と受け取る努力をしているでしょうか。

例えば皆様も着用しているマスクですが、「暑いな、うっとうしいな」と思うか、「風邪やインフルエンザにかかっていない」「毎日口紅を引かなくていい」「毎日ひげを剃らなくていい」と受け取ることもできる。私はこういう考え方が、ひながたを辿ることに繋がると思っていました。

しかし、諭達を拝読して、私はまだまだ浅い思案だったと思いました。この考え方は、世間一般のプラス思考で、信仰を知らない方でもたどり着くのです。そこには神様の思召、教祖の教えを土台とした思案がありません。

さあ、月日がありてこの世界あり、世界ありてそれ／＼あり、それ／＼ありて身の内あり、身の内ありて律あり、律ありても心定めが第一やで。

明治20年1月13日

とあるように、神様の御守護があるってこそ今の姿がある。これがこの道の思案の元なのです。私の思案の中に、かしの・かりものと、いう基本教理を土台とした思案が

なかったことに気付きました。

教祖は、貧の道中をお通りくださいました。明日炊く米のないときでさえ教祖は、「水を飲めば水の味がする。親神様が結構にお与え下されてある。」とお子さんたちを励ましながら通られました。神様からお与えいただく御守護、かしの・かりもののありがたさを感じること、どんな中でも心一つで喜べるとお教えくださった尊いひながたです。

### かしの・かりものを台に

私たちの日々には、いろいろなことが起こってきます。嬉しいこともあればつらいこともある。

殊に迎える三年千日、成人させてやろうとの親心から、普段以上に厳しいお仕込みを頂くこともあると思います。そんなときにこそ、教祖だっただうされるのか、親神様は何を仕込んでくださったているのだろうか、ふしから芽が出る御守護を頂戴すべく、かしの・かりものを土台として、神一条の思案を重ねるのです。

今から40年前、教祖百年祭に向かう年祭活動の時句で、東西礼拝場ふしんの真っ只中でもあり、全教が大きな高揚感と共に、勇みに勇んでいたときです。その年祭活動2年目の昭和59年9月、前大教会長であった父が出直すという大きなふしがありました。

出直したときはただ悲しくて茫然自失でした。出直し直後に、母が涙を流しながら、「ここを喜ばせてもらおう」と、私たち兄弟姉妹に言っていました。私はまだ24歳で、信仰的に何も分かっておらず、喜べるわけがないと思っていました。日が経つにつれて、悲しみの心と共に大きな不足の心が湧いてきました。

父は何度となく入院もし、大きな手術もしておりました。しかし、東西礼拝場ふしん副委員長、実施部長というご用を仰せつかり、「命をかけて勤める」と言って懸命にご用に邁進していました。私はその姿を見て誇らしくもあり、必ず身上も御守護いただけると信じておりました。

あとひと月半で東西礼拝場の竣工のおつとめを迎える、あと1年と少して教祖百年祭を迎える、そんな中での出直しに、「あんなに懸命に勤めていたのに、なぜ？」と不足しました。神様の御守護や存在さえも疑った状態でした。

しかし、このような心の状態から立ち直っていくきっかけとなったのは、父の倒れる直前の事を聞いた後でした。父は倒れる前日、ふしん委員会の先生方と、竣工のお礼づとめや竣工披露式の打ち合わせをしており、すべて決めた上で「これで、わしのしなければならぬご用はすべて終わったなあ」と言っていたそうです。その後、容態が急変して倒れ、出直したのです。「命を懸けて勤める」と言っていたご用をすべて勤め上げからの出直しでした。

この事実を聞かされ、自分の心が変わっていききました。本来なら、以前の大きな手術をしたときに出直していたかもしれない。それ以前に、シベリアでの抑留生活で亡くなっていたかも知れない。それ

を信仰のお陰でここまで生きながらえさせていただけた。神様の御守護をいただいて、世紀の大事業である東西礼拝場ふしんのご用を、お与えいただいた命の限り、十分に存分に勤め上げることができた。また後々続く私たちに、ご用を担う大切さや、真剣に心を込めてご用を担う姿勢をも、神様の親心から残すことができたと思うのです。

私は父の出直しという大きなふしから、神様の御守護、親心のありがたさ、成ってくる姿の中に大きな親心があると知らされました。また、どんなつらい中でも、かしの・かりものを台とした神一条の思案さえできれば、そこから一筋の光が見え、必ず喜びに繋がることが分かりました。

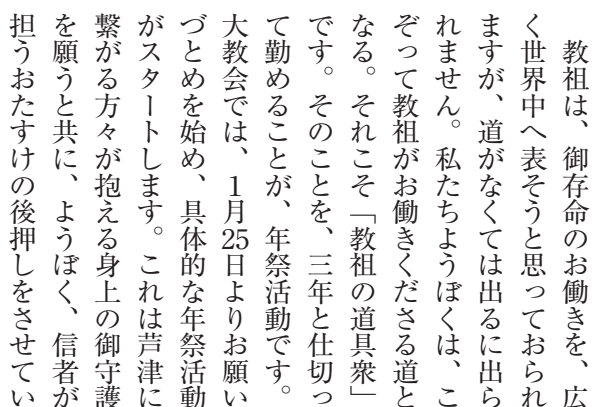
現在、大きなふしの真っ最中で、どうしても喜べない方がおられたとしても、必ずやその中には親心があるはずです。神一条の方へ思案を寄せることで、少しの光が必ず見出せると思うのです。その思案の努力が、明るい心へと我が心

を導くのです。このような思案ができること自体、この道を信仰している値打ちではないでしょうか。日常で成ってくる姿を、かしの・かりものを台とした神一条の思案で受け取り、前向きな明るい心を定めて通ることが、ひながたを辿ることであり、私たちがすべき、陽気ぐらしへの成人の努力です。

### 教祖の道具衆に

教祖の御年祭は、教祖が現身を隠されるという大きな事情から勤められるようになりましたが、教祖が現身をもってお働きのようになったすけ一条の道から、存命の理のお働きで世界中を駆け回るお働きへと転換された日とも言えると思います。世界たすけの主体を、ようぼくへ、教会へと移してください。明治20年陰暦正月26日です。私たちようぼくの取り次ぐおたすけに、教祖は御存命のお働きを下さるのです。

はやくとをもてよふとをもへともみちがのふてハでるにでられん



ただくものです。

神様は、日々常々、絶え間なく御守護くだされ、親心をおかけくだされています。信仰者にとれば毎日が信仰生活です。絶え間なくおかけくださる神様のお働き、御恩に報いるために、毎日親神様・教祖を、教会のことを心から離さず、日々信仰実践を続けるところに与えがあり、成人があり、信仰の喜びが生まれてくるのです。

大教会長様は、年祭活動一年目はとにかく「動く」一年としたいと仰せくださいます。思っているだけ、考えているだけに留まらず、心に決めたことを実行する。日々自ら積極的に動くことが、さまざまな気づきや新しい人との繋がりを生み、新たなおたすけへと繋がっていくのだと思います。

動かなければ何も始まらないし、何も変わりません。日々の暮らしの中で、ひながたを目標に、自分なら何ができるかを思案して、持ち場、立場、徳分を存分に活かして、積極的な行動に繋げていきましよう。

(要旨)

春季大祭 祭典役割									
祭主	扨者	扨者	座りつとめ	前	後	てをどり	地方	ちやんぼん 拍子木 太鼓 すりがね 小鼓	胡三味線 弓
大教会長	岩切正義	守田清一	瀧本庄司	井筒敏成	奥田正徳	会長夫人	湯川正圀	奥田眞治	井筒ちぐさ
指図方	賛者	賛者	瀧本庄司	石川健郎	望月恵美	梶川りよ子	加世田洋	中村俊和	榎理恵子
今川政治	新居里実	西本義之	奥田正儀	花岡忠和	川畑正博	山田秀子	樋川泰士	吉田裕樹	梶川文子
献饌長 岩切正教	伝供	在籍者一同							

教務部報

教人登録

洪 善明（真明彰化）

立教186年2月4日

おさづけの理拝戴《12月》

藤原 公子（直 轄）

中場 光栄（芦 玉）

堤 俊博（四ッ海）

前田 響（吹 田）

丸野 友也（真大奄）

〈拝戴日順 5名〉

立教185年 成果

初席者 56名

おさづけの理拝戴者 49名

修養科生 24名

教 人 12名

立教186年 心定め

初席者 420名

おさづけの理拝戴者

修養科生 210名

教 人 100名

初席《12月》

〈5名〉 日方

〈1名〉 直轄、末宝、浪華

浦、芦南

〈順序運びより 9名〉

計 報

大教会准役員

靱分教会四代会長

岡本久衛氏 おかもとひさこ

令和5年1月25日出直され

た。89歳。



告別式は、1月28日湯川正

岡大教会役員斎主のもと、大

阪府八尾市の葬祭場で執り行

われた。

氏は昭和8年、父・岡本久

長、母・八百代の長男として

大阪市西区で生まれ、昭和27

年おさづけの理拝戴、30年検

定合格、同年教人登録、37年

灘見幸榮と結婚、52年靱分教

会四代会長に就任、54年大教

会准役員登用。

大教会では修養科教養掛主

任をはじめ、主にひのきしん

部で務められ、大阪教区では

中央支部壮年部長、副支部長

を歴任された。温厚で優しい

性格で、周囲からも慕われた。

年間統計（自令和4年1月1日～至令和4年12月31日）

項 目 名 称 ( ) 内教会数	初 席	の お 理 さ づ け	修 養 科 修 了	教 人
大 教 会 (1)	11	12	1	1
靱 部 (13)	2	1	2	
東 津 (23)	2	5	1	1
吉 野 川 (29)	2	2	2	1
島 原 (16)	7	3	2	
日 方 (15)	8			1
稗 島 (7)	3	1		2
本 津 (2)				1
日 高 (2)				1
始 良 (5)				
津 和 (12)		1		
門 司 (6)	2	2	1	
當 別 (6)	1	1		4
大 島 (26)	5	7	9	
沖 縄 (3)	1	1	3	
尼 崎 (2)	1	2		
四 ツ 山 (5)	4	2	1	
大 冠 (2)				
島 下 山 (1)				
天 保 山 (3)		1	1	
青 木 (1)				
芦 浪 (1)		1		
甲 邊 (1)	1			
芦 華 (1)				
天 津 (1)				
入 江 (1)				
豊 野 (1)	1			
紀 周 (3)	1	4	1	
勝 明 (1)				
神 の 島 (1)				
兵庫眞洲 (1)		2		
芦 ノ 郷 (2)	1			
本 明 勇 (2)				
明 道 (1)				
芦 東 (1)				
和 鎮 (3)	2			
神 滝 本 (1)				
芦 明 徳 (1)	1	1		
真明彰化 (2)				
本 氣 (2)				
芦 明 照 (1)				
真 伯 (1)				
合 計 (209)	56	49	24	12

あしっスプリングフェスタ

3/27～30 一春の若年層育成強調期間一

27 月 HAPPY 徒歩団参 ～帰ろう おちばへ～

【対象】中学生から 25 歳の若者

【内容】詳細については、今後お知らせします。

28 火 春の学生おちばがえり ～次代を担う  
ようぼくへ～

【内容】午前 10 時より式典【本部中庭】

午後から直属アワー【話所】

29 水 わかぎの集い ～繋がろう 同世代の仲間と～

【対象】所属教会に繋がる中学生

【内容】午前 10 時開講【大教会】

おつとめ練習 お楽しみ行事など

30 木 第 51 回少年会芦津団総会

【内容】午前 10 時開会【大教会】

おつとめ（8交替） 総会式典 成人門出式

お楽しみ行事 お供え作品展